富士市今泉・六所家主屋の襖絵について

高林晶子

目次

はじめに
一、六所家と東泉院
二、主屋の構造
三、各室の襖絵について
四、鈴木香峰について
おわりに

はじめに

六所家は、富士市中央部に位置する今泉地区にある。その歴史は古く、鎌倉時代には富士山信仰の拠点とされた東泉院という密教寺院を営んでいたといわれている。近年、現当主の申し出により、当市が、建物を含めた敷地や、主屋・土蔵に収められた膨大な資料の保存・利活用を図ることとなっている。

このうち、当館では、土蔵や主屋にあった資料約四万七千点を対象に、平成一八年度に基礎整理を行い、教育委員会文化振興課において建物現況調査を行った。一九年度からは総合調査事業として文化振興課が庭園測量図面作成等基礎調査と埋蔵文化財の試掘を行い、当館は引き続き古文書・書画・民俗の各分野の詳細調査を行っていく予定である。

本稿では、平成一九年三月に発行された『六所邸建物現況調査報告書』をもとに、襖絵が収められていた状況を紹介し、これらを描いた作者に言及して今後の調査に資することとしたい。

一、六所家と東泉院

富士市今泉八丁目の六所家は、明治初年まで東泉院という寺院を営んでおり、富士郡下方浅間五社別当職を代々世襲してきた。東泉院の創建年代は不明であるが、平安時代初期、妙行法師が興したと伝えられる。当初は浄土院と号し、村山（現富士宮市）の興法寺と共に富士山修験道の拠点としての役割を果たしてきたとされる。

竹谷靭負氏の論考[註(一)]によると、中村高平『駿河志料』第二巻「富士山東泉院」の条に

村山別当の古書に、興法寺開祖頼尊とあり、当院も然り、元一寺にて、共に修験なり。

とあることから、興法寺と東泉院は共に修験系の寺院で、元来一つの寺であったと指摘している。また、竹谷氏は、頼尊が村山興法寺と共に、東泉院及び中里村八幡宮別当多門坊をも兼帯していたと推測している。

戦国時代の東泉院は、興法寺とともに今川氏の庇護を受けていたとされ、今川氏の使僧として各地の戦国大名のもとへ走り軍事的役割を果たしたといわれている。また、六つの土地を領有していることから六所姓を名乗ったとも伝えられる。

江戸時代の東泉院は、醍醐寺派の密教寺院として知られ、幕末から明治初年にかけては、一四代将軍・徳川家茂や皇女和宮が立ち寄るなど、格式の高さを窺わせる。

二、主屋の構造

六所邸建物現況調査は、富士市教育委員会文化振興課の委託により、静岡県伝統建築技術協会理事の石川薫氏によって行われた。本調査では、六所家の主屋・土蔵・門塀について測量が行われ、平面図・断面図・側面図・正面図などが作図された。今回は、本調査報告書をもとに、主屋の構造や特徴について紹介していく（図1参照）。

六所家主屋は、木造平家建て、寄棟屋根桟瓦葺の建物で、延べ床面積は二三四．八二㎡（七一．〇五坪）である。南側正面中央に間口二間の式台玄関を構え玄関を入ると幅一間の畳縁となる。畳縁は通り土間を除く南面一帯から引き違い建具を介して東側一帯にまでつながり、東側北端には幅一間の押入れが備わる。外部はヌレ縁を備えた土庇（どびさし）がまわされている。

式台玄関から畳縁を通った八畳間は、正面右手に幅一間の先祖祀りのための神棚を備える。この八畳間東側には、床の間と付書院を備えた九畳間、西側には土間へつながる八畳間が備わる。

神棚裏には九畳間があり、東側は押入れを備えた八畳間、西側は一〇畳広さの板の間となっており、これら三間の北側には幅三尺の縁側が通っている。

以上主要六間の柱間装置は、神棚と床の間廻りの壁以外には全て障子や襖の建具が入る。この内、障子は床の間付き九畳間の東面一間半と南面二間及び北側の縁側と各室との境に用いられ、それ以外の部屋の境には襖が用いられる。

南・東・北側の三方に廊下を突き出して便所が設けられている。

建物の西側に土間を設けるが、土間は大黒柱の通りで前後に分かれ、前土間の南側に内玄関、西側に大戸を備えた勝手口とし、南西角に三畳間を備える。後土間には後に増築されたとみられる浴室から、外部のカマドや外流しへつながる。後土間から幅一間の廊下へ上がり、北側へ突き出した台所へつながる。

以上が主屋の概要である。続いて本調査に基づく石川氏の所見によると、次のとおりである。

小屋裏等における調査でも、棟札などの建立経緯を記した史料は発見されず、部材の風蝕具合や材の使い方、意匠などの外見から明治末期から昭和初期にかけて建てられたものと推定している。

また、平面形式は、片側に土間を配置し、大黒柱の通りをはさん

で六つの部屋が二列に並ぶ、民家建築の形式では「併列六間取り型」とよばれる間取りで、これは名主や財産家などの家に多くみられるという。正面中央に格式を持つ式台玄関を設け、部屋の周囲に畳縁や縁側を配した大規模な住宅であるとしている。

土間境奥の部屋は一〇畳広さの板の間とし、天井に大きな煙出しを備えているので、以前は囲炉裏があったのではないかと推察している。

土間部分は、農家などでは通り土間として広い空間とするが、ここでは大黒柱の通りで前後二室に分け、前土間は人が出入りするウチニワ、後土間はダイドコロの扱いをしたものと推定している。

増築箇所は浴室、台所のほか、東側に突き出した便所が畳縁との取り合いが不自然であり、土庇を分断する形で取り付いているので、後から付けたものと想定している。

部屋廻りの柱は全て五寸角のヒノキで、土間廻りの柱は五・五寸角のケヤキ、大黒柱は九寸角のケヤキという全体的に少し太い柱を多用しており、整然と組まれた小屋梁組などは比較的新しい建築手法であり、特に素晴らしい材料や意匠は見られないが、重厚な造りで由緒を感じさせる建物であると報告している。

三、各室の襖絵について

本稿で紹介する襖絵に、①～⑨の番号を振って設えられていた位置を示したものが図1である。ここからは、順を追って紹介していく。

①（東面）書画貼り交ぜ　（西面）板戸

式台玄関をあがり、畳縁を通って正面にある、先祖祀りの神棚を備えた八畳間と、西側の土間へ続く八畳間の境に据え付けられていた二間幅の襖で、四面からなる。神棚のある部屋側、つまり襖の東面には、短冊や扇面、色紙などに表された和歌や漢詩などの書や画が貼り交ぜられている。一方、土間に近い部屋側、つまり襖の西面は、板戸となっている。

ここからは、東面について少し紹介をするが、紙面の都合上、詳述は割愛させていただく。以下、最も右のものを第一面とし、最も左のものを第四面とする。

東面第一面

（法量）外寸　一八三・五cm×八六・〇cm×三・〇cm

i漢詩（扇面）　香雪庵筆　紙本墨書　二三・二cm×四七・〇cm

ii短歌「雪」　大綱筆　紙本墨書　二九・〇cm×一五・三cm

iii漢詩　柴山桂一筆　紙本墨書　一〇八・〇cm×二九・二cm

iv短歌（短冊）　典海筆　紙本墨書　三六・一cm×五・九cm

v高士観瀑図（短冊）　介寿筆　紙本墨画　三六・一cm×六・〇cm

vi竹に雀図　鼎筆　紙本墨画　六六・六cm×二六・六cm

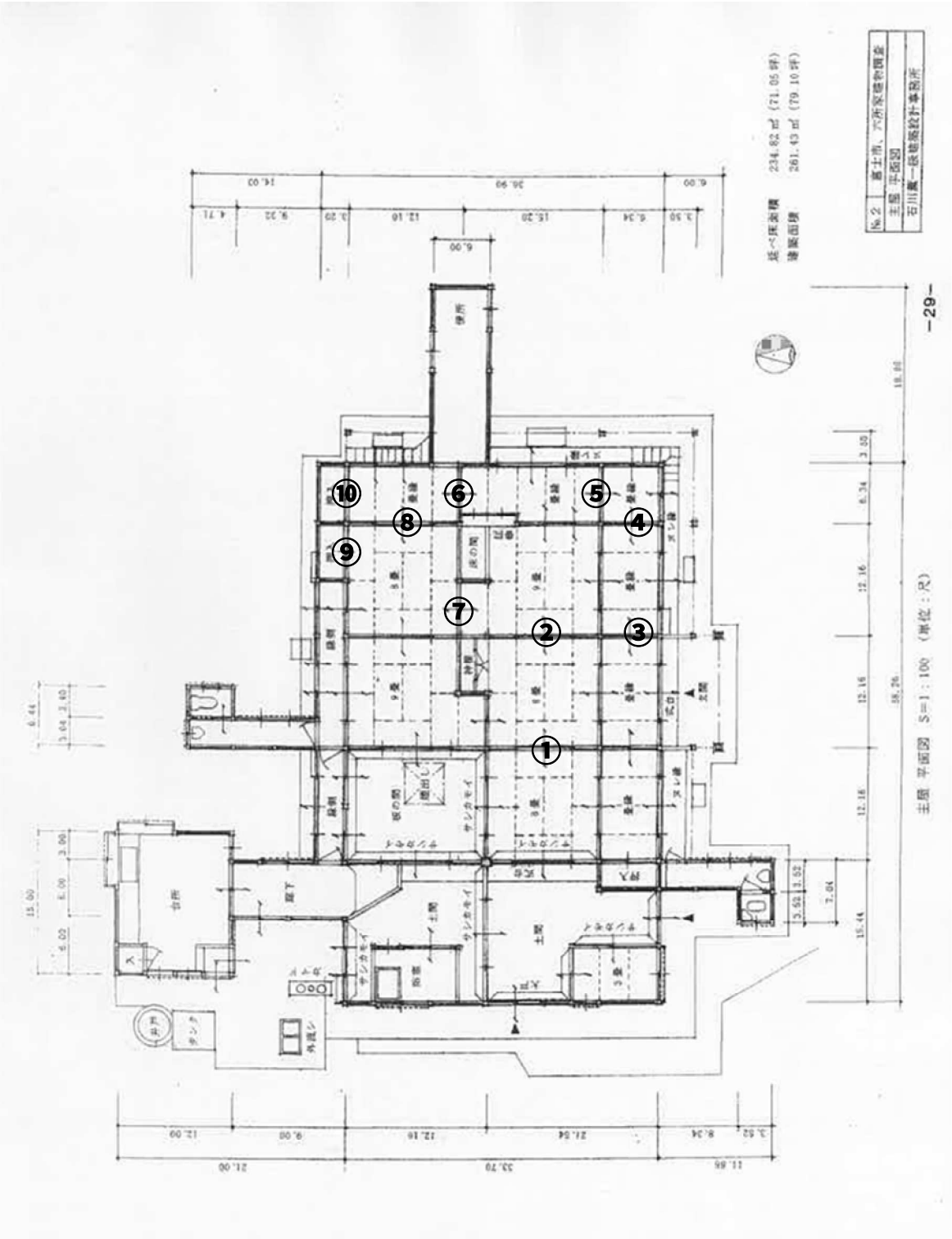


図１：六所家主屋平面図及び襖絵の配置

(『六所邸建物現況調査報告書』をもとに作成)

①東面第四面　①東面第三面　①東面第二面　①東面第一面

東面第二面

（法量）外寸　一八三・五cm×八六・二cm×三・〇cm

i書「水月」　大綱筆　紙本墨書　二九・〇cm×三七・五cm

ii短歌「十日菊」（色紙）千浪筆　紙本墨書　二〇・一cm×一八・四cm

iii詠狐婚姻歌並反歌　清年筆　紙本墨書　九八・五cm×二八・六cm

iv短歌（短冊）　直胤筆　紙本墨書　三六・三cm×六・一cm

v嵐山春色図（短冊）　友山筆　紙本著色　三六・三cm×六・一cm

vi竹画賛　竹後直顕筆　紙本墨書画　七二・六cm×二七・一cm

東面第三面

（法量）外寸　一八三・三cm×八六・〇cm×三・〇cm

i俳画　六行筆　紙本墨書画　一〇三・六cm×二八・〇cm

ii梅に雀図　寿冶筆　紙本墨画　五八・四cm×二六・五cm

iii短歌（短冊）　乕法筆　紙本墨書　三六・三cm×六・一cm

iv福助図（短冊）　紙本著色　三六・六cm×六・〇cm

v墨蘭図　介寿筆　紙本墨画　二六・四cm×五七・〇cm

東面第四面

（法量）外寸　一八三・〇cm×八六・二cm×三・〇cm

i書（扇面）　合作　紙本墨書　一九・〇cm×四二・五cm

ii短歌（色紙）　紙本墨書　一九・六cm×一六・九cm

iii書「安静」　米翁筆　紙本墨書　二九・三cm×五一・〇cm

iv石榴図　木須筆　紙本墨画淡彩　九四・六cm×二九・〇cm

v短歌（短冊）　常宥筆　紙本墨書　三六・五cm×五・九cm

vi山水画賛（短冊）　大塚半山筆　絹本墨書画

三六・〇cm×六・〇cm

vii里芋図　東明筆　紙本墨画　三六・九cm×二三・四cm

②（東面）山水図　（西面）書画貼り交ぜ

神棚付きの八畳間と、その東側の床の間と付書院のある九畳間との境に据え付けられていた二間幅の襖で、四面からなる。床の間付きの部屋側、つまり襖の東面には、四面にわたって大画面の山水図が描かれる。神棚付きの八畳間においては、①の東面と②の西面とが対面する格好となり、②の西面には、①の東面と同様、書画が貼り交ぜられている。

東面

山水図　紙本墨画金砂子

（法量）第一面　本紙　一七三・五cm×八三・五cm

外寸　一八三・〇cm×八九・四cm×二・九cm

（法量）第二面　本紙　一七三・五cm×八三・五cm

外寸　一八三・〇cm×九一・二cm×三・八cm

（法量）第三面　本紙　一七三・五cm×八四・〇cm

外寸　一八三・五cm×八九・七cm×三・八cm

（法量）第四面　本紙　一七三・五cm×八三・五cm

外寸　一八三・五cm×八九・七cm×二・九cm

②東面山水図第四面　②東面山水図第三面　②東面山水図第二面　②東面山水図第一面

落款がなく、作者も制作年代も正確には知れない。主屋の部屋の中では最上位にあたるため、引き手には金が施され、一六枚の花弁をもつ天皇家の「十六弁八重表菊紋」と同じ紋章が刻まれている。

全体に近景から中景の山々が描かれ、第二面引き手下には、山間に佇む楼閣の姿も描かれている。上空にかかる霞が金の砂子で表現されている。

西面第一面

①の東面と同じく、西面については、基本情報のみ記し、詳述は割愛する。

（法量）外寸　一八三・五cm×八九・七cm×二・九cm

i 一行書「山中・・」　山岡鉄舟筆　紙本墨書
　一三八・八cm×二八・六cm

ii 壬生忠岑短歌（色紙）　紙本墨書　二一・四cm×一八・二cm

iii 短歌（短冊）　紙本墨書　三六・二cm×六・〇cm

iv 短歌「勧学」（短冊）　正斎筆　紙本墨書　三六・二cm×六・〇cm

v 楼閣図　友山筆　紙本墨画　三六・二cm×六・〇cm

vi 墨蘭図　紙本墨画　五九・四cm×二七・四cm

西面第二面

（法量）外寸　一八三・五cm×八九・七cm×三・八cm

i 詠山振花歌　丹波守永章筆　紙本墨書　三六・〇cm×五三・〇cm

ii 宝珠図　安堂筆　紙本墨画　九六・四cm×二九・四cm

iii 烟江勉釣　松韻筆　紙本墨画　二六・〇cm×二七・六cm

iv 短歌「夏不二」（短冊）　忠惟筆　三六・四cm×六・〇cm

v 山水画賛　紙本墨書画　三六・二cm×六・〇cm

vi 僧侶図　紙本墨画　二四・八cm×二七・八cm

西面第三面

（法量）外寸　一八三・〇cm×九一・二cm×三・八cm

i 五言絶句「山邨春・・」　雪山筆　紙本墨書
　一四〇・二cm×二九・六cm

ii 短歌（色紙）　紙本墨書　二〇・〇cm×一八・〇cm

iii 俳句（短冊）　負山筆　三六・二cm×六・〇cm

iv 短歌「日」（短冊）　乗法筆　三六・二cm×六・〇cm

v 山水図（短冊）　紙本墨画淡彩　三六・二cm×六・〇cm

vi 菊花図　東明筆　紙本墨画淡彩　六六・四cm×二六・八cm

西面第四面

（法量）外寸　一八三・〇cm×八九・四cm×二・九cm

i 長歌及び反歌　大江春平筆　紙本墨書　三六・二cm×五三・四cm

ii 山水図　柱山筆　紙本墨書画　一〇二・六cm×三〇・〇cm

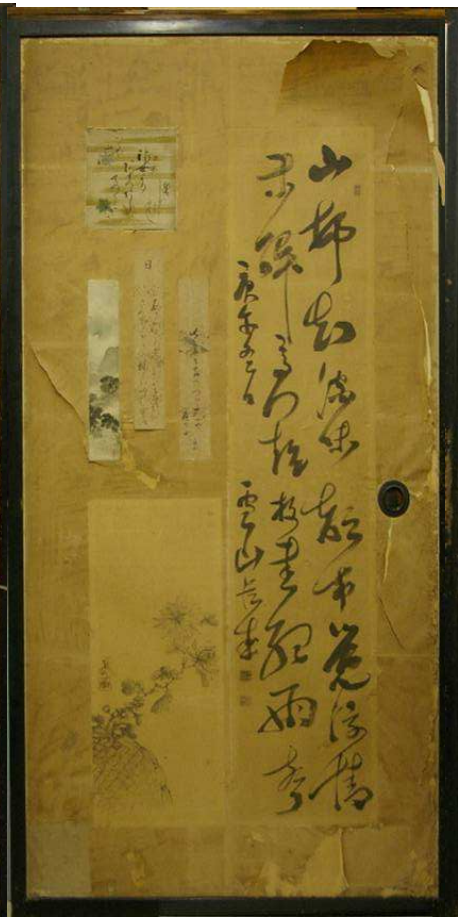
iii 短歌「対亀■齢」（色紙）　哲■筆　二一・二cm×一八・〇cm

iv 短歌「嶺上松」（短冊）　全孝筆　三六・四cm×六・〇cm

v 楼閣山水図（短冊）　絹本着色　三三・二cm×六・〇cm

vi 布袋図　昌川正清筆　二七・四cm×二七・〇cm

②西面第四面



②西面第三面

②西面第二面

②西面第一面

③（東面）「臨藍田並渓山不尽図」　（西面）唐紙

床の間付き九畳間南側の、畳縁四畳部の西側に収められていた一間幅の襖で、二面からなる。式台玄関を上がってすぐの畳縁との境に据え付けられていた。西面は④・⑤の裏面と同じ唐紙が使われている。

東面

「臨藍田並渓山不尽図」　鈴木香峰筆　安政五年　紙本墨画金砂子

（法量）第一面　本紙　一七三・六cm×八四・〇cm

外寸　一八三・八cm×九〇・二cm

（法量）第二面　本紙　一七三・八cm×八四・〇cm

外寸　一八三・八cm×九〇・二cm

第二面の左上隅に落款があり、次のとおりである。

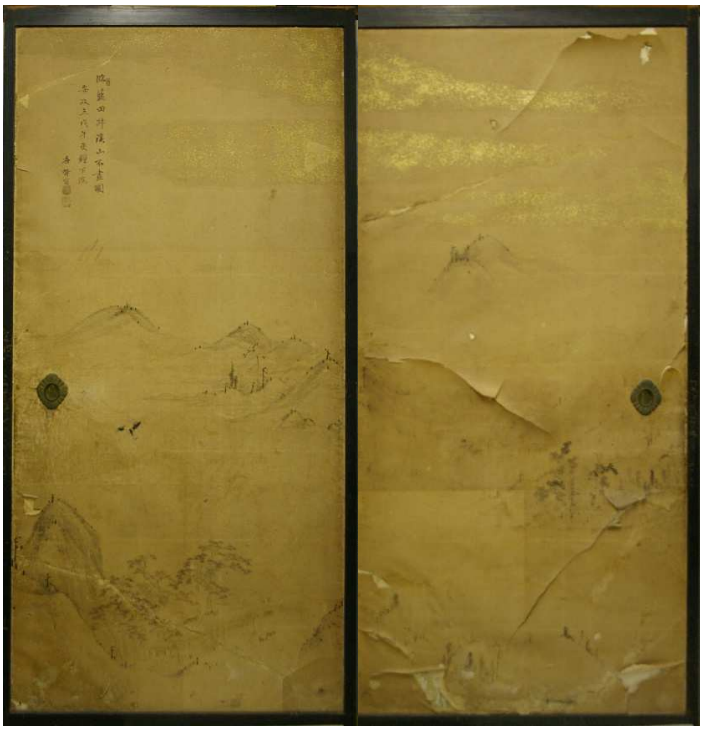
「臨藍田並渓山不尽図

安政五戊午夾鐘下浣

香峰写「香峰□□」（白文方印）「□□」（白文方印）」

年記から、安政五年（一八五八）二月下旬に描かれたものである。

作者は、吉原宿脇本陣扇屋の当主で、宿の問屋役を務め、晩年には山水画をよくした鈴木香峰（一八〇八～一八八五）である。作者については次の項で詳述する。　②の山水図と同じ引き手が使われ、第一面中景から第二面近景にかけて、簡素な家々が軒を連ねる様子が描かれている。



③東面「臨藍田並渓山不尽図」第二面　　③東面「臨藍田並渓山不尽図」第一面

④（西面）山水図　（東面）唐紙

床の間付き九畳間南側の、畳縁四畳部の東側に、一間幅に二面収められていたもので、東列の畳縁部との境に据え付けられていた。東面の唐紙は、③・⑤の裏面と同じものが使われている。

西面

山水図　鈴木香峰筆　紙本墨画金砂子

（法量）第一面　本紙　一七三・四cm×八三・六cm

外寸　一八三・〇cm×九二・〇cm

（法量）第二面　本紙　一七三・二cm×八三・四cm
外寸　一八三・四cm×八九・六cm

第一面の右下隅に落款があり、内容は次のとおりである。

「香峰写」

③と同様、鈴木香峰の作で、制作年代も同時期とみられる。引き手も、②の山水図及び③と同様の金の菊花紋が施されている。第二面近景には橋を渡る人物と牛、中景には橋を渡る馬上の人物が描かれ、はるか遠くの楼閣がある町へと視線を誘う。

④西面山水図第二面　④西面山水図第一面

⑤（北面）「武陵桃源之図」　（南面）唐紙

畳縁東南角の二畳間と、その北側の畳縁五畳間を仕切っていた一間幅の襖で二面からなる。五畳間に面する北面に「武陵桃源之図」が描かれ、南面には、③・④の裏面に使われているものと同じ唐紙が設えられている。

北面

「武陵桃源之図」　鈴木香峰筆　紙本着色金砂子

（法量）第一面　本紙一七三・七cm×八三・五cm
外寸一八三・〇cm×八九・七cm×三・〇cm

（法量）第二面　本紙一七四・〇cm×八四・〇cm
外寸一八三・〇cm×八九・七cm×三・〇cm

第二面左下部に落款があり、次のとおりである。

「武陵桃源之図
安政五戊午晩春写
香峰道人　「香峰□□」（朱文方印）」

陶淵明の名文「桃花源記」に著された理想郷・桃源郷を主題としたもので、③・④と同じく作者は鈴木香峰である。引き手も②・③・④と同じ金の菊花紋である。第一面の近景から第二面にかけては、退色が著しいが、かつては鮮やかな緑青で彩られていたであろう山々と、山間に枝を伸ばす白い桃の花が描かれている。第二面の遠景には、白い桃の花とともに、水田や川、川に掛かる橋を渡る母子

と犬、草葺の建物と三人の談笑する人物が描かれている。上空には②・③・④と同じく金砂子が用いられている。

⑤北面「武陵桃源之図」　第一面

⑤北面「武陵桃源之図」　第二面

⑥（南面）山水図

（北面）第一面「月下高低影風前遠近杳」

第二面「香木清浄裡韻在斎寥時」

付書院脇の畳縁五畳間と、その北側の畳縁四畳間との境に据え付けられていた一間幅の襖で、二面からなる。縁の内側に位置する面は、書院の壁に固定されており、表裏ともに引き手がなく、引き手跡も見受けられない。

南面

山水図　鈴木香峰筆　紙本墨画金砂子

（法量）第一面　本紙　一七三・四cm×八三・六cm

外寸　一八三・四cm×八九・八cm×三・〇cm

（法量）第二面　本紙　一七三・六cm×八三・八cm

外寸　一八二・八cm×九〇・〇cm×三・〇cm

第二面左上隅に落款があり、次のとおりである。

「戊午中呂

香峰写「香峰」（白文方印）「惟忠之印」（朱文方印）」[註(一)]

③・④・⑤と同じく、鈴木香峰の作であり、年号はないが、干支からみて安政五年の作とみられ、四月に完成している。第一面のみにある引き手も、②・③・④・⑤と同じ金の菊花紋である。第二面は書院の壁に密着していたためか、襖の骨組みが一部露出している。第一面には岩山と樹木が描かれている。第二面近景には馬上の二人の人物と主人の荷を担ぐ供が描かれ、中景から遠景にかけては、全体に退色が著しく判然としないが、湖沼のような情景が描かれている。

北面第一面

「月下高低影風前遠近杳」　大塚半山筆　紙本墨画

（法量）本紙　一三七・四cm×六八・〇cm

外寸　一八三・四cm×九〇・〇cm×三・〇cm

⑥南面山水図第二面　⑥南面山水図第一面

右下部に落款があり、次のとおりである。

「月下高低影風前遠近杳

丁酉冬日　半山人「大塚□□」（白文方印）「半山人」（朱文方印）」

作者は大塚半山（一八四四～一九二七）である。大塚半山は、名を義一郎といい、遠州榛原郡初倉村（現島田市）の生まれで、遠州地租改正の交換米取消運動や静岡県茶業振興に尽力した政治家である。晩年の鈴木香峰に画を師事していた。本作は明治三〇年（一八九七）、半山五四歳（数え年）の作品とみられる。

⑥北面第二面「香木清浄裡韻在斎寥時」　⑥北面第一面「月下高低影風前遠近杳」

北面第二面

「香木清浄裡韻在斎寥時」　大塚半山筆　紙本墨画

（法量）本紙　一三七・〇cm×六七・八cm

外寸　一八二・八cm×九〇・〇cm×三・〇cm

左上部に落款があり、次のとおりである。

「香木清浄裡韻在斎寥時

丁酉冬日　半山人「大塚□□」（白文方印）「半山人」（朱文方印）」

第一面と同様、作者は大塚半山で、制作年代は明治三〇年であり、竹と梅が描かれている。

⑦（南面）山水図

（北面）第一面　「春涛盈峡漲仏茗満壷煎」

第二面　「蕭々洒々復□々一半　風■■■清」

床の間脇の一間幅の襖で、二面からなる。

南面

山水図　紙本墨画金砂子

（法量）第一面　本紙　一七一・二cm×七六・二cm

外寸　一八一・三cm×八五・〇cm×三・〇cm

（法量）第二面　本紙　一七一・二cm×七六・三cm

外寸　一八一・〇cm×八五・〇cm×三・〇cm

②の山水図、③の「臨藍田並渓山不尽図」、④の山水図、⑤の「武陵桃源之図」、⑥の山水図と同じく、引き手に金の菊花紋が使われている。これらは全て床の間付き九畳間及びその周縁部の畳縁の襖絵である。この山水図は、②の山水図と同様、落款がなく作者や制作年代が不明だが、同じ部屋の襖であることや、画題、作風からみて、双方ともに鈴木香峰の作で、制作年代も同時期のものであろう。

⑦南面山水図第二面　　⑦南面山水図第一面

北面第一面

「春涛盈峡漲仏茗満壷煎」　大塚半山筆　紙本墨画

（法量）本紙　一三七・二cm×六七・九cm

外寸　一八二・八cm×八六・六cm×三・〇cm

右部に落款があり、次のとおりである。

「春涛盈峡漲仏茗満壷煎　丁酉冬日　半山人「大塚□□」（白文方印）

「半山人」（朱文方印）」

⑥の北面と同じく、作者は大塚半山で明治三〇年（一八九七）冬

の作である。次の第二面も同様である。

北面第二面

「蕭々洒々復□々一半　風■■■清」　大塚半山筆　紙本墨画

（法量）本紙　一三七・二cm×六八・〇cm

外寸　一八三・〇cm×八六・三cm×三・〇cm

左部に落款があり、次のとおりである。

「蕭々洒々復□々一半　風■■■清　丁酉冬日　半山人「大塚□□」（白文方印）「半山人」（朱文方印）」

⑦北面第一面
「春濤盈峽漲仏茗満壺煎」

⑦北面第二面
「蕭々洒々復□々一半
風■■■清」

⑧（西面）山水図　（東面）葛布か？

北東部の八畳間と、その東側の畳縁四畳間との境に用いられていた二間幅の襖で四面からなる。畳縁に面した東面には、葛布のような目の粗い生地が四面に貼られている。

西面

山水図　大塚半山筆　紙本墨画

（法量）第一面　本紙　一七三・〇cm×八二・〇cm

外寸　一八二・〇cm×八九・六cm×三・〇cm

（法量）第二面　本紙　一七五・〇cm×八三・五cm

外寸　一八二・〇cm×八九・三cm×二・九cm

（法量）第三面　本紙　一七五・五cm×八三・三cm

外寸　一八二・〇cm×八九・六cm×二・九cm

（法量）第四面　本紙　一七三・〇cm×八二・〇cm

外寸　一八二・五cm×九〇・〇cm×二・九cm

第四面の左部に落款があり、次のとおりである。

「丙申春日　半山人写「大塚義印」（白文方印）「畊雲□□」（朱文方印）」

⑥、⑦の北面と同じく、遠州の政治家・大塚半山の作であり、制作年代は明治二九年（一八九六）とみられる。四面に渡り、近景には生い茂る樹木が描かれ、第四面には巨大な岩山を迫力ある図様で表す。第三面遠景には帆掛け舟が二艘描かれている。

⑧西面山水図第四面　⑧西面山水図第三面　⑧西面山水図第二面　⑧西面山水図第一面

⑨（南面）第一面「春浦征帆」　第二面「白雲春山」

（北面）板戸

東列畳縁の北端にある押し入れに使われていた一間幅の襖で、二面からなる。押し入れ内部に接する北面は板戸である。

南面第一面

「春浦征帆」　大塚半山筆　紙本墨画

（法量）本紙　一三七・〇cm×六七・六cm

外寸　一八四・〇cm×九〇・〇cm×三・〇cm

右上部に落款があり、次のとおりである。

「春浦征帆　半山人写「義印」（白文方印）「半山人」（朱文方印）」

大塚半山の作品で、近景に海に面した絶壁を描き、遠景に海上を進む舟が描かれている。春ののどかな情景が描かれる。

南面第二面

「白雲春山」　大塚半山筆　紙本墨画

（法量）本紙　一三七・〇cm×六八・〇cm

外寸　一八四・〇cm×九〇・〇cm×三・〇cm

右上部に落款があり、次のとおりである。

「白雲春山

半山人写「義印」（白文方印）「半山人」（朱文方印）」

第一面同様、大塚半山の作品で、春霞立ち込める深山を遠景に、近景には満々と水を湛える川や舟が描かれる。

⑨南面第一面
「春浦征帆」

⑨南面第二面
「白雲春山」

⑩（南面）第一面「秋渓清詠」　第二面「寒江独釣」

（北面）板戸

北東部の八畳間に備わる一間幅の押入れに使われていた襖で、二面からなる。北面の押し入れ内部にあたる面は、板戸となっている。

南面第一面

「秋渓清詠」　大塚半山筆　紙本墨画

（法量）本紙　一三五・五cm×六七・八cm

外寸　一八一・五cm×八六・〇cm

左上部に落款があり、次のとおりである。

「秋渓清詠

半山人写「義印」（白文方印）「半山人」（朱文方印）」

大塚半山の作で、秋の情景が描かれる。

南面第二面

「寒江独釣」　大塚半山筆　紙本墨画

（法量）本紙　一三七・四cm×六七・八cm

外寸　一八三・〇cm×八五・六cm×三・〇cm

左上部に落款があり、次のとおりである。

「寒江独釣

丁酉冬日於富士山麓家□下

半山人写「義印」（白文方印）「半山人」（朱文方印）」

年記から、明治三〇年（一八九七）冬の作とみられ、「於富士山麓家□下」とあることから、この地で描かれた作品のようである。冬の山間の渓谷で独り釣り糸をたれる人物を描いた、唐の柳宋元の詩を主題とした作品である。

⑨と⑩の襖絵は、四季を描く主題であり、本紙の法量もほぼ一定で、印章も全て同じものが使われていることから、同時期に同じ事情で描かれたものとみられる。⑩の第二面の落款から、この一連の作品は、半山がこの地に滞在し、描いたものであることも知れる。

⑩南面第二面
「寒江独釣」

⑩南面第一面
「秋渓清詠」

総括

ここまで、一〇種の襖を概観すると、六所家が各部屋をどのように位置付けていたかがわかる。

まず、先祖祀りの神棚付きの八畳間については、神棚に向かって左右の襖に和歌や漢詩などの書や画を貼り交ぜた襖が使われている。六所家は、明治初年の廃仏毀釈により東泉院が整理されるとともに、邸内にあった日吉浅間神社などの管理に専従し、神職を全うすることとなる。多くの家で先祖祀りの場といえば仏壇が想定されるであ

ろうが、当家の場合はそれが神棚ということになる。江戸後期から幕末にかけては、国学が隆盛した時代だが、その牽引車となったのが、各地の神職者だったことは良く知られるところである。ここに貼られた作品は、六所家に集い国学を学ぶ機会のあった人々の作品の可能性もあり、今後、詳細な調査を行っていきたい。

次に、床の間付きの九畳間であるが、床の間に向かって左の襖及び床の間脇の一間幅の襖、この部屋の周縁部の畳縁を仕切る四箇所の襖全てに鈴木香峰の作品が用いられ、「鈴木香峰の間」といった様相を呈している。なお、周縁部の畳縁との境には、採光と通風のため障子が設えられている。この部屋は、主屋において最も高い格式の部屋であり、全ての襖の引き手に金の菊花紋が刻まれている。作者・鈴木香峰も当時の六所家及びこの地域の人々にとって重要な人物ととらえられていたことがわかる。

次に、東北角の八畳間であるが、北側の一間幅の押し入れ及びその東隣の一間幅の押し入れ、東側の二間幅の襖、南側の一間幅の襖に、鈴木香峰の弟子・大塚半山の作品が使われ、こちらは「大塚半山の間」といえよう。なお、北側にある縁側との境には障子が入り、東側九畳間との境の襖には、両面唐紙が使われていた。この部屋は、家族の寝室として使われた日常的空間である。

一方、先の石川氏の見解によると、この主屋は、明治末期から昭和初期にかけて建てられたものとされている。今ここで紹介した襖絵の数々は、江戸末期から明治三〇年ころの作品が多く、この主屋の前身の建物に使われていたか、もしくは新築にあたって既に所蔵していた作品を表装し直した可能性が高い。

四、鈴木香峰について

ここで、先程来登場する鈴木香峰について紹介する。

鈴木香峰は、名を惟忠、通称を伊兵衛といい、後に耕蔵と改めている。香峰とは雅号で、四二歳ころまでは高峰という雅号も使用していた。香峰は、文化五年（一八〇八）、幕臣・原権次郎の三男として江戸四谷の西念寺横町（現在の新宿区若葉）に生まれ、文政一一年（一八二九）、二二歳の時に、吉原宿脇本陣扇屋の婿養子に入る。香峰は慶応三年（一八六七）六〇歳で引退するまで、宿の問屋として人馬継立を円滑にすすめることに邁進し、宿組合取締役を務め、農兵隊の統率・指導にあたるなど宿の発展のために尽力する一方で、和歌をたしなみ書画に長けた文人でもあった。在職中の慶応元年（一八六五）には、一四代将軍家茂が東泉院に宿泊しており、香峰が指導していた農兵の訓練の様子を富士川河原で見学している。

ここで、香峰の文人としての側面を紹介していく。香峰は、次兄とみられる江戸の国学者・原久胤（生没年不詳）の影響からか、和歌をよくたしなんでいる。原久胤は、富士市神谷の旧家・伊達家と交流があり、伊達家六代目本益敏則は、久胤の一番弟子で香峰とも

親しくしていた。伊達家所蔵の歌集『うつそひのもと』には、惟忠（香峰）のほか、伊達家六代目敏則や遠州の国学者・石川依平（一七九一～一八五九）、原久胤らの歌が編まれている。また、当館の脇本陣鈴木家旧蔵資料にある歌集には、惟忠（香峰）、石川依平門下で伊豆国学の祖・竹村茂雄に学んだ今泉村木綿島（現富士市今泉）の渡辺親保（平右衛門）などの歌が収められている。

一方、江戸四谷に生まれた香峰は、同じく江戸四谷の大番町（現在の新宿区大京町）に住む旗本で画家の大岡雲峰（一七六四～一八四八）に師事していた。雲峰は山水人物に長じた鈴木芙蓉（一七四九～一八一六）の門人で、兄弟弟子には谷文晁がおり、山水花鳥を得意としていた。雲峰亡き後は次男の雪峰に学び、後に遠州見附（現在の磐田市）の画人で渡辺崋山門下の福田半香（一八〇四～一八六四）にも画法について助言を得ていたとされる。香峰が得意としたのは南画や文人画とも呼ばれる山水画で、中国の故事を主題とした作品を多く遺している。これまでに知られている香峰の作品で、最も年代が古いものは、慶応二年（一八六六）五九歳の時に描かれた「秋景山水図」（当館蔵）である。今回紹介した襖絵は、安政五年（一八五八）香峰五一歳の作で、更に遡る作例であることがわかる。

また、当館蔵の脇本陣鈴木家旧蔵資料には、香峰と交流があったとみられる著名人の作品が多くみられる。和歌に秀でた国学者で、香峰の師・大岡雲峰とも交流があった千種有功（一七九七～一八五四）、江戸後期の名筆家・巻菱湖（一七七七～一八四三）、同じく書家の市河米庵（一七七九～一八五八）らの作品である。いわば片田舎の吉原宿において、このような面々と交流があった香峰の存在は非常に大きなものであったと想像される。

さらに香峰は、明治六年（一八七三）のウィーン万国博覧会に「青緑山水図」と「富士図」を出品し、宮内省がこれらの作品を買い上げているほか、同一〇年（一八七七）の第一回内国勧業博覧会では、「水墨山水図」を出品し褒状という賞を受賞している。晩年には静岡県南画界の巨星と称され、後進たちにも慕われたとされる。

おわりに

六所家主屋の襖絵について紹介してきたが、個々の調査が未熟なものもあり、今後詳細な調査を継続していくとともに、その成果を報告し、六所家の位置付けを行っていきたい。特に襖や主屋の成立事情については、大量に遺された古文書群からも手がかりとなる内容が発見される可能性があり、六所家総合調査が円滑に進み、その全体像が明らかになることに大きな期待を寄せる。

本文註

註一、竹谷靭負著『富士山の祭神論』岩田書院発行、平成一八年

註二、二つの印章は、天地逆に捺されている。

主要参考文献

石川薫一級建築設計事務所編集『六所邸建物現況調査報告書』富士市教育委員会発行、平成一九年三月
新庄道雄著・足立鍬太郎修訂・飯塚傳太郎補訂『修訂駿河国新風土記下巻』国書刊行会発行、昭和五〇年
富士市立博物館編集・発行『第三九回企画展幕末の問屋役吉原宿の鈴木香峰』平成一三年

（当館学芸員）